

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

【20世紀最終号】



大図研セミナー案内と発表者募集

京都支部久々の大型企画が2001年から始まります。

「ネットワーク環境下における情報サービス」という統一テーマのもとに4月から毎月1回のペースで、連続5回予定しています。情報ネットワーク技術の発展により、情報サービスのあり方も急激に変化しています。

この連続企画では、そのさまざまな側面に焦点をあてる予定です。すでに講師の方と交渉中であり、具体化すれば、順次ご案内いたします。

講義は毎回、土曜日の午後2時から5時までを行います。その後、懇親会を行います。第5回目には会員(3名)の発表を予定しています。

そこで発表者を募集します。

1人あたり、発表時間は30分、質疑応答は20分で構成されます。意欲ある方は奮って応募して下さい。

応募の締切日は2月28日とさせていただきます。

応募先は

井上雅人 立命館大学総合情報センター情報管理課

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

Tel:075-465-8222 Fax:075-465-8252 E-mail:ino-mst@st.ritsumeit.ac.jp まで

4月セミナー： 4月28日(土)

午後13～17時

キャンパスプラザ2階第2会議室

5月セミナー： 5月19日(土)

午後13～17時

キャンパスプラザ2階第3会議室

6月セミナー： 6月23日(土)

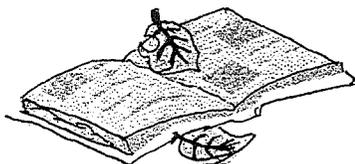
午後13～17時

キャンパスプラザ2階第3会議室

目次	大図研セミナー案内と発表者募集……………1頁
	『雑誌と真集 1972-1975』について……………2頁
	大図研セミナーによせて……………3頁
	第2回京都支部委員会/報告……………4頁
次	会費納入のお願い……………4頁
	物思う年頃-大学と大学図書館……………5頁
	数珠つなぎ第53回……………6頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで
編集気付 (dkamr302@kyoto.zaq.ne.jp) 田北まで

「堤豪範写真集 1972-1975」について



篠原俊夫

堤さんが写真友達数人と語らって自前の写真集を出したいという希望があることは側聞していた。しかし、さまざま経緯があって出版計画は頓挫したはずである。それが思いがけず堤さんの単独写真集として出版されたものを見せられて驚いた。いつもながらの堤さんの即断即決とその予期せぬ出来映えの両方に驚いたのである。

「堤豪範写真集：1972-1975」には、49葉のキャビネ版の写真が収載されている。

「小豆島」と題された1972年撮影のモノクロームの写真から「村へ」と題された1980年までの写真は、日本の身近な風景と人物を撮ったものであり、残りは1995年の海外旅行で撮影されたカラー写真である。国内の写真はすべてモノクロームで撮影されている。日本の伝統的な風景のなかの人物を写すためにはモノクロームでなければならぬというこだわりがあるのかも知れない。逆に海外の風景はすべてカラーで撮られているが、それはそれで美しい。ここにも作者の写真における独自の美学があると思える。

それにしても、1980年から1995年までの空白は何を意味するのだろうか。撮影は続けられているのだから今回の写真集に選ばれなかっただけなのだろうか。

私はろくな写真を撮ったこともないし、写真集をじっくり鑑賞したこともない。有名な写真家も名前くらいしか知らない。映画にいたっては最近では、映画館で見ることは年に一回もあればいい方である。写真や映像を批評する資格はないと思っている。だから、あくまで素人の視点で写真を見ていいか悪いかということにしかならないのだが、いい写真集だと思う。

敢えて言えば、私の知る数少ない写真家の一人である荒木経惟の初期の世界にも通ずるものがあると思う。堤さんは写真集を「ブレッソンのように」と題するあとがきで締めくくっているのだが、ここには有名写真家の言葉を引用しながら、彼の写真論が述べられている。

とりたてて新奇なことが言われているわけではない。なによりも被写体に、言い換えれば風景の中の人物に一步でも二歩でも近寄ることの大切さについて述べている。あとは構図、カメラアングル、カメラワークが大切だと言う。けれん味がなく、まことにまっとうである。彼はこれらのことを好きな映画の世界から学んだという。このあとがきを読んだ後、あらためてはじめから写真集を見てゆくと彼の愛好する映像の世界がよく理解できるように思う。

49葉の写真はほとんど人物を活写することにその目的があることは自明で、全く人物が登場しない風景写真は2葉しかない。風景のなかの人物に近寄り、寄り添い、ときにはまったく撮る側と撮られる側が一体化してしまっているように見える写真がある。そういう写真がたぶん作者の会心の作品なのだろうと思ってみる。

どこと言って新しい手法があるわけでもなく、珍しい風景があるわけでもない。しかし、見終わった後、やすらぎとぬくもりが心に残る。それだけでいい写真集だと言ってもいいのではなかろうか。写真集は豪華な装いこそないけれど、その地味な装丁がかえって写真の素朴な味わいを引き立てているように思える。

(しのはら としお 京都大学総合人間学部図書館)

1972-1995：堤 豪範写真集 発行日：2000年10月13日 第1刷
写真 堤 豪範 印刷・製本 株式会社石田大成社 (非売品)

大図研セミナーに寄せて



金森 孝之

支部報に記事を書いてもらいたいとの督促の E-メールが届いていた。11月30日に来る予定であったとのこと。むむむっとうなった。そういえば、この前の会議とそのようなことがあったかなと思ひ出す。えらいことを引き受けたとじとりと冷や汗がでる。

小学校のころから作文を書いていい思ひ出がない。事務的な文章でさえもまともに書けない。文章を書くとき自分の無知蒙昧が曝出するため、文章に自身を持つ人を除いて、皆いやに違いない。といつてごねても仕方ないので、このままだうだと書くしかない。

京都支部では、大プロジェクトとしてテーマ「ネットワーク環境下の図書館」ということで、連続したセミナーを開催すること。これにそつて何か書かないといけぬのだろつが、知識ゼロで書きようがない。そこで脱線して、話変わります。支部の会議の中で講演してもらつてはどうかという講師候補の中に旭屋の湯浅俊彦様の名前が挙がつていた。

湯浅様と言えば、私の民博時代からの知り合ひで、旭屋様と呼び習わしておりました。さて、大図研の全国大会の時に出版の分科会に出席したのですが、講師として湯浅俊彦(かもがわ出版)とありました。すつかり旭屋様は転職されたと思ひ込んで分科会に出たのですが、見知つた人が前に座つていないので、いぶかしく思つているとやはり別人と判明しました。分科会は、出版社の人はシュンとして、印刷会社の社長様は元気でというのが印象的でおもしろかつたです。

ところで、かもがわ出版ですが、立派なホームページを提供されておられます。小出版社といひながらも、加藤周一の著作出版で有名とのこと。なかなか興味深い図書が多いので、一度のぞいてください。分科会の終わりにも、質問時間がありまして、そこで旭屋の湯浅俊彦様のことを質問しますと、同姓同名とのことと、よく間違われるとのことでした。お二人ともに、いろいろと本やら雑誌に記事やら書かれて活躍して、しかも出版社と本屋と分野も近くて、ますます混乱するようです。

さて、書店に關係する私の個人的な貧弱な体験を話します。3年間ですが、大阪府の南端にあります原子炉実験所の図書室に勤務しておりました。昼休みは、近くの喫茶店に漫画を読みに行くのが日課でした。喫茶店もマスターの趣味でしょうか、大量の漫画が置いてありました。但し、いわゆるマンガ喫茶ではありませんので念のため。長編物ばかり選んで読みまして、「マスター・キートン」「ベルセルク」「スプリガン」など大好きです。近年、マンガ喫茶が流行しているようで、私の住む高槻市でも数店営業しているようです。それと、新古書店というのが、高槻市にもやってきました。古書店に新とつけるのは変ですが、実際、店内は普通の本屋といった雰囲気と、あのかび臭く薄暗い古本屋ではありません。ここには100円コーナーというのがありまして、ここを物色して、おもしろい本を探すのを楽しみにしています。安いからと何冊も買うと読みきれぬのですが。

テレビでインターネット書店のCMを見るようになりました。「近頃の女子高生、インターネットで本を買う」というものです。京大生協においても、インターネットで図書の注文が可能。辞書を買うつもりで、生協の書店に行つたのですが、目当ての図書がありません。

でも図書というのは、現物を見ないと買えないですね。仕方ないので、丸善の京都支店で図書の内容を確認してから(丸善様すみません!)、生協にインターネットで発注しました。というように、平穩無事の私の身近でさえこんな具合ですので、書店をめぐる事情は激変しつつあるようです。

最近「本とコンピュータ」という雑誌に街の本屋は生き残れるかという特集がありました。街の本屋でも、自らインターネットを利用した書籍販売に踏み出している書店もあるようで、その意見でも自らの才覚で新世界に踏み出していく気概があふれていました。

こうした、読書環境激変の中で、出版メディアはどう変わっていくのかということ。先のセミナーの中に取り上げるのもおもしろいだろう。湯浅様は「デジタル時代の出版メデ

「ア」という図書も書いておられるし。しかし、これは旭屋様の方だろうか？全く、同姓同名はややこしい。あーそうだ、出版社と書店の二人の湯浅様を講師としてお招きするとおもしろいだろうな。しかし、予算的に無理だろうな。セミナー名「二人の湯浅：書店 vs 出版社、出版メディアをめぐるトークバトル」なんてね。

しかし、この話題は大図研セミナー「ネットワーク環境下の図書館」にふさわしいかどうか。いまだに、湯浅様に連絡をしておりますし、まだ夢想している段階ですが、もしもこのセミナーが開催されたら、きっと興味ある内容になると思いますので、まずは前宣伝をやっておきます。

(また、いやなものを書いてしまった！)

(かなもり たかゆき 京都大学経済研究所図書掛)

第2回京都支部委員会

日 時：2000年11月7日(火)午後7時～9時
場 所：京都大学附属図書館3Fスタッフラウンジ
出 席：井上、大館、大綱、金森、篠原、田北、香海

【報告事項】

1. 財政情報

- ・1998年度会費未納者 2名
- ・1999年度会費未納者 5名
- ・2000年度会費未納者 20名

【審議事項】

1. 今年度の活動について

1) 忘年会 12月7日(木)

2) 大図研セミナー

- <内容>
 - ・テーマは「ネットワーク環境下の図書館」
 - ・外部講師によるものを4回と会員の発表によるもの1回
- <時期・時間帯>
 - ・毎月1回の連続講習会を開催する。
 - ・時期的には4月以降。
 - ・時間帯は土曜日の2時から5時まで

<会場> ・キャンパスプラザ(JR京都駅前)

<参加者> ・大図研会員に限定しない。
・準備期間をおき、「図書館雑誌」「図書館界」などの図書館関係雑誌や他の媒体で広報する。

3) 図書館見学 ・日時と場所は未定

2. 支部報について

- ・10月号から毎月、支部委員が交代で「大図研セミナー」に関連した内容の記事を書く。

3. 日図協評議員選挙について(2001年1月14日～25日)

- ・京都支部として前回と同じ2名を推薦する。
- ・推薦された2名の方から承諾をとりつける。
- ・投票依頼の分担は次回に決める。

4. 次回支部委員会 12月5日(火)

於 京都大学附属図書館3Fスタッフラウンジ

会費納入のお願い

2000年度会費未納の会員さんは、至急会費の納入をお願いします。
会費についての問い合わせは財政担当支部委員の大綱浩一さん、又は最寄りの支部委員又は、編集子までお願いします。

物思う年頃—大学と大学図書館



田北十生

今年10月中旬に人事異動で図書館を離れることになった。一度図書館の状況を多少とも知り、別の部署に移されて図書館が今度は外から眺める機会を得た。

そこで改めて、図書館を取り巻く問題は、優れて大学の問題であり、大学教育の問題であると思うようになった。

今、大学は国公私立の区別を問わず、激動期に入っていると思う。国立大学の独立法人化問題が最近にぎやかになってきた。私立大学はそれに先んじて、存亡かけて取り組みが真剣になされている。図書館もその影響を受けずにはいられない。聞けば、京都のある私立大学では職員の20%をリストラしようとしているところさえある。

図書館だけがリストラの対象ではない。予算も良くてゼロシーリング！

銀行救済どころか国自体が倒産寸前の借金地獄に墮ちている。かたや学ぶべき学生は、「学力低下」を嘆かなければならない状況が発生し、行き場を失った「情熱」は「怨念」となって暴走をはじめている。

これがいわゆる「世紀末」現象でかたづけられる問題ではない。口を開けば「21世紀の展望」と言う言葉が行き交うが、どこに展望があるのだろうか？

このように言えば、今度は、「未来は暗澹としていて出口の見えないトンネルにいる」と嘆く人がいるが、それは本当だろうか？

私は、いわば騒然とした大学を取り巻く情勢をみて、自責に念に駆られる。というのも今騒がれているのは、自発的な危機意識からというよりも、外から襲ってきている危機にあたふたしているといった方が適切な気がするからである。

私も大学に職を得ている一人であるが、自発的主体的に、これらの問題が押し寄せてくる前に、教育と研究の危機を乗り越える方策をどれだけ主体的に取り組んできたかと問われると怪しいからである。もちろん、これまでいい加減にしてきたというわけではない。

そうではないが、時代の要請の方が先に走っていたのである。今振り返ってみれば、大学という業界の中だけしが見ず、時代の流れというものをしっかり見極めることに疎かになっていたのではないだろうかと思う。

図書館を例にすれば、今図書館の直面している課題に対して、どのような有効な方策を私たちは講じてきたのであろうか？

図書館人として、外から改革を迫られるほど不名誉なことがあるだろうか？

今、図書館が求められていることは、あまりにも大きい。図書館員だけの努力では、実現不可能であると言い切れる。では、その実現をするために、図書館人として、どのような有効な努力をしてきたのであろうか？

これは、全ての図書館人への問いである。

大学がああしてくれなかったや予算がとれなかったですまして来ている問題はないであらうか？

大学がしてくれなかったらどうするのか、予算がなかったらどうするのか、その解決策と展望を自らの使命として正面から受け止め、切り開く活動を展開してきたのであろうか？

図書館人が図書館の危機を自ら切り開く努力無しに図書館の課題はなんら解決しない。それを果たしてきたかを今、一人ひとりが、自らに問いかけて見るときではなからうかと痛切に自己反省的に思う、このこのごろである。

「三人寄れば文殊の知恵」ということわざがあるが、これは、そういう自己反省的に物事を捉え、危機感と危機打開の志を持った三人でなければ、三人寄っても愚にもつかない結論しか導き出せなくなるように思う。

とは言いながら、危機の時代は見方を変えれば、すごくやり甲斐のある時代であることも間違いはない！

(たきた かずお 京都橘女子大学企画広報課長)

